

主 題：キリスト者の教会に対する心遣い②**聖書箇所：コロサイ人への手紙2章2－5節****テーマ：教会に対するキリスト者のふさわしい心遣いとはどのようなものなのか？**

先週から私たちは、キリスト者の教会に対する心づかいについて、パウロのことばから学び始めました。きょうもその続きを考えてみたいと思います。コロサイ2：1－5を開きながら、まず少し考えてみてください。

先週、ある会社が提示した一つの求人広告をネット上で見つけました。その詳細は次のようなものでした。職種としては現場総監督。勤務時間は基本1日24時間、週に7日、135時間以上の勤務が求められ、その間の休憩はほとんどなし。時には徹夜を求められることもあり。またこの職種には、医学や栄養学、お金の管理といったさまざまな能力に加え、常に周りに注意を払いながら、複数の職務を同時にこなす責任も求められていました。個人的な休暇はなく、むしろ週末や正月などの休みには仕事量が増加し、そして何よりこの仕事によって得られる給与は一切なし。完全無給のボランティアでした。さて、皆さんはこんな仕事につきたいと考えるでしょうか？おそらく多くの人が「NO!」と言うでしょう。でも、実際にはこの職種についている人が世界に何億人といいました。いったいだれのことか気づきました？そうです！“母親”でした。もちろん、私はきょうが父の日だということはわかっています。父にも感謝するわけですが・・・この求人広告というのは、数年前、実際にある会社が母の日のキャンペーンの一環として作成したものでした。世界で一番過酷な仕事をしている“母親”に感謝をささげる——それが目的だったのです。こうして改めて考えてみても、母親の働きというのは、とてつもなく大変なものでした。夫と協力して家庭を支えるその責任は大きく、家族に対するその心づかいは、確かな愛情にあふれたものでした。

そして、そんな家族に対する母親の心づかいに心を留めるとき、私たちは同じように大きな愛情を神の家族に対して示した人物の姿を思い浮かべることができます。それは、パウロでした。母がその子どもを養い育てるかのように、神の家族、教会のために自分自身のすべてをささげていた人物の心づかいは具体的にどのようなものなのか、ということをお私たちは先週から学び始めたのです。

○教会に対するパウロの心遣い：四つの特徴**1. “苦闘”を伴う心づかい 1節**

今回は四つの特徴を持ったパウロの心づかいの二つ目の途中まで見ました。一つ目に見た特徴は、苦闘を伴う心づかいでした。パウロはいつも教会に関心を払って、その必要を喜んで満たそうとしました。もちろんそこには、いろんな痛みや悩みを覚えることもありました。しかし、それでも彼は、神様から受けた愛というものを自分のこととして本当に知っていたからこそ、教会全体を分け隔てなく愛そうとしていたのです。キリストが教会を愛したように教会を愛して、キリストが教会のためにご自身をささげられたように彼もまた教会のために自分をささげようとしていました。そんな犠牲的な愛に基づく苦しみや痛みを伴う姿勢、それが彼の示した苦闘を伴う心づかいでした。

2. “目的”を伴う心づかい 2－3節

次に、二つ目に見た特徴は、目的を伴う心づかいでした。兄弟姉妹を愛して彼らのために必死に苦闘していたパウロ。でもそんな彼の苦闘には、より具体的な目的がありました。彼は気にかけている人々の歩みのうちに、あるものが見られるようになることを強く願って、彼らのために熱心に働いていたのです。いったいどんなものが見られるようになることを願っていたのか？2－3節の部分で、特に三つの目的が挙げられていました。

●パウロの苦闘：三つの目的

1) 心に励ましを受けるため 2 a 節

一つ目の目的は、兄弟姉妹が励ましを受けるためでした。パウロは彼らの心が励まされることを願って真理を語り、必死になって苦闘していたのです。

2) 愛によって結び合わされるため 2 b 節

また、二つ目の目的は、兄弟姉妹が愛によって結び合わされるためでした。パウロは、彼らの励まされた心が同時に、愛によって結び合わされ、ますます一致していくことをも願って、必死に苦闘していたのです。私たちがこういった内容だけを考えても、パウロはどれほど教会のために大きな愛を示していたことでしょうか。もちろんそんな彼の姿は、今の私たちにとっても模範とするべき確かな愛情にあふれた心づかいでした。でも同時に、これですべてではありませんでした。パウロは続けているいろんなことを教えてくれているのです。ですから、きょうのテキストに戻っていただいて、1-5節までを読みまますので、それぞれよく見てください。

コロサイ：2：1-5

「:1 あなたがたとラオデキヤの人たちと、そのほか直接私の顔を見たことのない人たちのためにも、私がどんなに苦闘しているか、知ってほしいと思います。:2 それは、この人たちが心に励ましを受け、愛によって結び合わされ、理解をもって豊かな全き確信に達し、神の奥義であるキリストを真に知るようになるためです。:3 このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。:4 私がこう言うのは、だれもまことしやかな議論によって、あなたがたをあやまちに導くことのないためです。:5 私は、肉体においては離れていても、霊においてはあなたがたといっしょにいて、あなたがたの秩序とキリストに対する堅い信仰とを見て喜んでいます。」

3) 更なる理解と確信を得るため 2 c-3 節

残された三つ目の目的は「さらなる理解と確信を得るため」でした。愛する兄弟姉妹たちの心が励まされて、愛によって一つに結び合わされるだけではなく、そんな彼らがますます完全な理解と確信とに達することを願って、パウロは苦闘していたのです。もう一度2節の、特に後半を見るとこう書いていました。「理解をもって豊かな全き確信に達し、神の奥義であるキリストを真に知るようになるためです。」と。これを読んで何となく意味がわかるかもしれませんが。でも少しことばを分けて考えてみましょう。まず、パウロはここで「理解をもって」と口にしていました。この「理解をもって」ということば、実を言うと同じ前見た1：9でも、同じものが使われていました。9節の特に中ほどにこう書いていますね。「あなたがたが、あらゆる霊的な知恵と理解力によって」と。ここで「理解力」と訳されていたのが、同じことばでした。では、このことばは具体的にどんな意味だったか覚えていますか？この「理解力」と訳されることばは、「みことばの教えや原則を、実際に自分の生き方に適応すること」を表していました。つまり、単に聖書の知識を頭にたくわえることではありません。正しいことが何なのかを知っているだけでもありません。日々の生活の中でそれぞれにいろんな出来事は起こり、問題も起こります。でもその中で、何が正しくて何が間違っているのかをみことばによって判断して、神様に喜ばれる選択をして生きていくこと、それをここでは「理解力」「理解」と言っていたのです。そのようにして理解をもって、コロサイの信仰者たちが神様の真理を自分自身のこととして知って、みことばによって変えられ、ますます成長していくことを絶えず祈り続けていました。みことばをただ知っているだけではなく、実際にそれを生きていくことを通して、自分のものとして理解していくことを祈っていたのです。それは、すばらしいことでした。なぜなら、かつては彼らも聖書や神様に聞き従うということ、愚かとしか思えないような罪人でした。神様の前に何が喜ばれるのか、などに関心を払うことさえありませんでした。まさに聖書が言うとおりの「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によって

わきまえるもの」(Iコリント2:14)だったのです。こうして御霊を持っていない生まれながらの人間は、だれであれ例外なく、自分自身の肉に従って歩み続けていました。かつては、そのように歩んでいたのです。

でも、今は変わりました。神様によって救われた者たちは、全く新しい者へと造り変えられました。人としてこの地上に来てくださった神の御子の死と復活のみわざは、罪の奴隷となっていた者たちを解放してくださったのです。ローマの8:2-3にこう書いています。「:2 なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。:3 肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。」と。もちろんよくご存じのとおり、救われた後にも葛藤はあります。主のことばに従うのに大きな痛みを伴って苦しむようなときも、時に罪に敗北を喫することもあります。でも、それでもなお、肉に従う者でなくなった者は、どうかして肉の思いから離れて、御霊に従うことをひたすら考えようとするのです。いのちをもたらしてくれるそのみことばに従っていくことを自分の喜びとし、それによって成長していきたい、とそう歩んでいこうとするのです。そしてそんな生き方こそが、その人の心に平安をもたらすものでもありました。先ほどのローマの続きにもこう書いています。ローマ8:5-6「:5 肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。:6 肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。」ですから、御霊が与えられて真理をわきまえることのできるようになった者は、神様の前に何が喜ばれるのかを自ら選択して、実際にみことばの真理に従って生きていこうとします。そのようにして信仰者はますますみことばの真理を自分のこととして知っていくのです。みことばをただ知識として持っているだけではなくて、理解をもって歩んでいくのです。そして、そのようにみことばの教えに従い続けていけば、その人のうちに持っている確信というものが強められていくのです。単に知識ではなくて、これは本当に生きた神のことばだ、という確信が増し加わっていくのです。もう一度2節に戻って、続きにこう書いていました。「理解をもって豊かな全き確信に達し、」ここで「確信」と訳されていたことばには、「完全な確かさ」とか「十分な確信」といった意味が含まれています。つまりパウロは、信仰者がみことばの真理を実際に自分のこととして生きていけば、ますます十分な確信へと到達するようになる、と言っていました。みことばを理解すれば、その真理が確かなものであると自分で実際に味わっていけば、それに対する確信も揺るがないものになっていく、と言うのです。

でもそれ以上に、パウロはここで兄弟姉妹に願っていたことがありました。先ほどの続きを見ると「豊かな全き確信に達し、神の奥義であるキリストを真に知るようになるためです。」と。願っていたこと、それは、「神の奥義であるキリストを知るようになること」でした。パウロは、兄弟姉妹がほかのだれでもないキリストを理解し、この方についてますます揺るがない確信を増し加えていくことを願っていたのです。救われた時にキリストを知った者たちが、ますます自分のこととしてキリストを知り続けていくということ、それはパウロにとっても彼らにとっても、また今の私たちにとっても常に重要なことでした。私たちの歩みにおいても「キリストを知る」と言うことは欠かせないのです。それは、どうしてでしょうか？

振り返って一番初めから考えてみてください。聖書は何を私たちに教えているのでしょうか？みことばははっきりと、私たちはみな、生まれながらに罪人なのだを教えていました。創造の初めからそうだったわけではありません。神様は初め、ご自身と親しい交わりを持つものとして人を造られました。しかしこの世に罪が入って、罪によって、私たちと神様との交わりは完全に壊れてしまったのです。こうして罪によってできた溝は、人の手にはどうすることもできないほど深刻なものでした。いやむしろ、聖なる神様の前に、罪はどんな小さな罪であったとしても必ず正しくさばかれなくてはなりません。みことばはこう言っています。ローマ6:23でも「罪から来る報酬は死です。」と。私たちはみな罪を

持っているがゆえに、死が当然値するものでした。永遠に滅ぼされて神の御怒りのみを受けるのがふさわしい存在でした。もちろん多くの人たちは、これを今も自分のこととして本当に受け入れようとはしていません。自分たちの罪をまるで大したことの無いもののように考えていたり、ほかの人といつも比べて、あの人と比べれば自分がやっていることは別に大したことはない全く小さな問題だ、と考えようとします。でも、私たちが、すべての人が決して忘れてはならないこと、それは、私たちがいったい何をしたのかということ以上に、私たちはいったいだれに対して罪を犯したのか、ということです。私たちが罪を犯したのは、何でも無い存在に対してではありません。私たちみなが罪を犯したのは、すべてにおいて義なる審判者に対してでした。どんなに小さい罪であろうとも決して見逃されることの無い、必ずさばきを下される聖く完全な神様に対して、私たちはひとり残らずみな、罪を犯し続けていたのです。だからこそ、私たちはみな、ただ滅ぼされてしかるべき罪人でした。この罪が赦されて、神様と和解するためにできたことは、私たちのうちには何もありませんでした。私たちの罪の問題を私たちにどうすることもできなかったのです。私たちに代わってほかのだれかがこの罰を受け、この罪の問題を解決して下さることでは、救いの方法はありませんでした。それを成し遂げてくださったのが、イエス・キリストだったのです。私たちに代わって成し遂げてくださりました。ローマ5：8-9にもこう書いています。「:8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。:9 ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」私たちが何かをしたのではありません。私たちがまだ罪人であったときに、私たちがまだ神様の敵として歩んでいたそのときに、イエス様がみずから進んで十字架にかかってくださいました。本来であれば、私たち自身が受けるべき、私やあなたが受けるべきその罪の罰を、その苦しみを、神の御怒りを、代わりにこの方が受けて死なれたのです。こうして罪のない神の子羊が私たちのすべての罪を背負って死なれました。この方が尊い犠牲をもって罪の代価をすべて支払ってくださり、信じるすべての者に救いを与えてくださったのです。私たちはただこのキリストによって救われました。私たちはただこのキリストの血によって義と認められました。私たちはこのキリストの犠牲によって、神の怒りから救い出されたのです。これが、神様の示してくださった愛でした。キリストこそが、ただ私たちの救いでした。いろんな手段の中から私たちにキリストというものが与えられたのではありません。キリストしかありませんでした。この方だけが、唯一の希望でした。この方だけが、私たちにとって唯一救いを与えることのできる十分なお方だったのです。だからこそ、こんなお方を自分自身の主として、自分自身の救い主としてひとりひとりが知る、ということは欠かせない重要なことでした。救いにおいて、それは絶対に欠かせないことだったのです。

でも同時に、このキリストは、ただ救いのためだけに私たちが知る存在でもありませんでした。この方は、救われた後の私たちの歩みにおいても、私たちの信仰生活においても、いや文字どおり、すべてにおいて必要で、すべてにおいて十分な存在だったのです。だからパウロはこのように続けていました。3節を見ると「キリストを真に知るようになるためです。」と言った後こう書いています。「このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。」と。何をパウロが言わんとしたのでしょうか？このときのコロサイの兄弟姉妹たちが置かれていた状況を思い返してみてください。コロサイの教会というのは、にせ教師が入り込み、間違った教えが入り込んでいてそれによって混乱が生じていたのです。にせ教師たちは言い回っていました。「キリストだけでは十分ではありません。救いにおいても、それぞれの歩みにおいても、キリスト以外の何かがあるには必要です。」と。間違いなく真理が捻じ曲げられて、福音が脅かされていました。人々に、キリスト以外のものを求めるように、と促していたのです。だからパウロははっきりと伝えました。「このキリストのうちに、知恵と知識との宝はすべて隠されているのです。」と。パウロが言いたかったことはもう明白でした。彼らにとってキリスト

以外の何かが必要ではありませんでした。それ以外の何かを追い求める必要もありませんでした。すべての知恵や知識は、キリストのうちにありました。キリストだけで十分だったのです。救いにおいても、その後の歩みにおいても、必要なものはキリストのうちにありました。だから皆さん、パウロは、そんなキリストを彼らがますます知るようにと願っていたのです。いろいろなものに目を向けるのではなくて、そこにしか必要なものはないのだから、それで十分なのだから、そのキリストをますます理解して、さらにこの方についての確信を増し加えていくこと、それが彼らにとっても最高のことだったのです。そして、これはもちろん私たちにとっても同じです。救いであろうが信仰生活であろうが、私たちにとってもキリストは十分な存在です。私たちがこの方のうちを見れば、そこに、私たちに必要なすべての知恵が、すべての知識が、宝が隠されているのです。

そうだとすれば、果たして私たちはこの真理を本当に信じているのでしょうか？皆さん、もし私たちが地図を渡されて、「ここに行けば宝がありますよ。」と言われたなら、何をします？多分皆さんなら、とりあえずいろいろなものを横に置いて、そこに行ってそこを掘ろうとするはずです。宝を探しに行こうとするはずです。聖書は私たちに教えてくれていました。「キリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されている」と。そうであるなら、どれだけ私たちはこのお方に心を留めて、この方を知ることによって日々熱心であり続けているのでしょうか？本当に私たちは、この方のうちに自分たちに必要なすべてのものがあると信じているのでしょうか？キリストをさらに知りたいと追い求めているのでしょうか？私たちがみことばを学んでいくのは、ただ知識をたくわえるためではありません。私たちがみことばを学び、それを生きていって、キリストに似た者へと変えられ、私たちがますますキリストを知っていくのです。そのような者へと変えられ続けているのでしょうか？本当に、キリストのうちに私に必要なものがあると、あなたは信じているのでしょうか？

もし、まだこのイエス・キリストを自分の救い主として、主として信じておられない方があれば、どうかきょう知ってください。神様に逆らって罪を犯して、今まさに滅びへと向かっているそんなあなたに必要な救いは、いろんなところにはありません。ここにしかありません。必要な救いは、キリストのうちにしかありません。ですから、どうかその方を求めてください。これまでの生き方をやめて、罪を悔い改めて、そしてこの方を自分の主として、救い主として信じ受け入れてください。そこに最高の喜びがあります。そこに救いがあります。その救い主をぜひ受け入れてください。

パウロはコロサイの兄弟姉妹の必要を覚えていました。彼らが、みことばやキリストに関する更なる理解や知識、確信を得ること、それが大切なのだとわかっていたのです。ですから、彼らがそれらを知ることができるように、確信を強められるために彼は苦闘していました。それがパウロの持っていた願いでした。必死になって苦闘していた三つ目の目的だったのです。

3・警告を伴う心づかい 4節

では次に、私たちはパウロの心づかいの特徴として三つ目のものを見てみましょう。これまで、苦闘を伴う心づかい、目的を伴う心づかいと見てきましたが、三つ目に見られる特徴は「警告を伴う心づかい」です。4節にこのように述べられていました。「私がこう言うのは、だれもまことしやかな議論によって、あなたがたをあやまちに導くことのないためです。」と。コロサイの兄弟姉妹のことを愛していたパウロは、そんな彼らの身を案じて「だれも偽りにだまされないように」とここで忠告していました。まるで愛にあふれた母親が子どもに対して優しさを示してあげるだけでなく、身の回りの危険を教えてあげるかのように、彼は教会に迫っていた大変な危険に関して警告していたのです。何があったとしても、十分なキリストから離れないようにと。そして、それは、彼らにとって非常に重要なことでした。というのも、ここに注目してほしいことばが一つあります。4節をよく見るとこんなことが出ていますね。パウロは「まことしやかな議論」と言っていました。「まことしやかな議論」ということばには、もともと「説得力のあることば」とか「ことば巧みな議論」といった意味が含まれています。だれかのことを説

得して何かを信じさせようとする、そんな口のうまいことばです。それを「まことしやかな議論」と言うのです。つまり、コロサイの教会に入り込んでいたにせ教師というのは、決して「私にはせ教師です」と書かれたハチマキのようなものを巻いて人々のうちに潜り込んできていたのではありません。だれが聞いても、すぐに間違っているとわかるような偽りを教えていたのでもありません。もしそうならだれひとりだまされないでしょう。でもそうではありませんでした。彼らは非常にことば巧みでした。真理のうちに少し嘘を混ぜて、人々を徐々に徐々に説得して、そして誤った道へと導こうとしていたのです。だからこそ、その巧妙さというものに気をつけるように、とパウロは警告していました。パウロは間違いなく、教会のうちに混乱をもたらす誤った教えの危険性をよく理解していたのです。それについても、私たちはいろんな彼の書いた手紙から見て取ることができます。コロサイの手紙を書いたのとほぼ同じタイミングで、同じく獄中で書かれたエペソ人への手紙の中でも、彼は人々をだまそうとする悪い教えに関して説明を加えていました。それがどれほど危険なものかがわかりやすいかと思います。エペソ4：14にまずこう記されています。「それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、」と。パウロは、信仰者たちがいつまでも霊的な子どものままでいてはいけないということを教えていたのですが、その理由として、間違った教えの持っている危険性——危険な性質、特性をここで挙げていました。特に三つのことばに注目してみてください。

▶「人の悪巧み」

まず一つ目は「人の悪巧み」ということばです。この「悪巧み」と訳されていることばは、聖書の中でここにしか使われていないもので、「サイコロを用いた遊び」を表していたりします。これは“すごろく”のようなものではなくて、特に人をだますような、不正が行われるようなサイコロの遊び、賭け事などを指していました。想像できると思いますが、よく注意してサイコロを転がそうとする人のことを見ていないと、彼は勝利のためにイカサマをしたり、バレないように自分の思いどおりの数字を出そうとするのです。悪巧みをする人物というのは、どうすれば人をだますことができるのかをよく知っています。そして自分の利益を得るためであれば、バレないように相手をだまそうとするのです。“間違った教え”というものも同じです。注意をしていないといつの間にかだまされていて、間違った方向へと引っ張られていくのです。

▶「人を欺く」

二つ目は「人を欺く」ということばです。この「欺く」ということばは「ずる賢さ」とか「狡猾さ」といった意味を持っています。自分の利益を得るために人を欺こうとするそんな人は、あらゆる方法を用いて相手を偽りの道へ引き込もうとします。その手段は非常にずる賢く、巧妙なものです。だからおもしろいのは、このことばは、エバをだましたあのサタンの様子を表すのにも用いられていました。Ⅱコリント11：3にこう書いています。「3 しかし、蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあってはと、私は心配しています。」思い返してみてください。サタンはどのようにしてエバを欺いていたでしょう？いきなり「実を食べなさい」と勧めていました？そうではありませんでした。サタンは非常に狡猾でしたね。いきなり実を食べようとは言わず、代わりにまずエバに質問しました。「園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」（創世記3：1）と。こうして彼女が神様のことばに対して疑いを持つようにと仕向けたのです。それに成功したサタンは、次に神様のことばを否定していました。「あなたがたは決して死にません。」（創世記3：4）と。そうやって疑いを持たせ、否定した後、最後に何をしたか覚えています？あたかも神様に従うことよりも、彼女が自分自身の思いや願いに従うことがそれに勝る喜びをもたらすかのように、だましたのです。“間違った教え”というものも同じです。いや、私たちを神様から遠ざけようとするものは、すべてこれと同じ手段を用いるのを見て取ることができます。

たとえ神様のことばがはっきりと示されていたとしても、まず疑問を抱かせます。そしていろいろな私たちでもってそれを否定しようとして、最終的に、神様に従わない選択をすることの方が、自分の考えに従って選択をすることの方が喜びをもたらす、とそのようにだますわけです。

▶「悪賢い策略」

そして最後三つ目は「悪賢い策略」ということばです。これは、人々を惑わそうとする者たちの手段が悪意に満ちていて、その策略があまりにも狡猾に綿密に計画されたものであることを表しています。その人たちの手段や計画というものが、あまりにも悪賢いもの、綿密に練られたものであるからこそ、人々はすぐにだまされてしまうのです。ここで私たちが覚えておかないといけないこと、それは、偽りの教えというのは非常に綿密に計画されたものであるので、一見すると本当かどうかわからないものが多いということです。先ほども言いましたが、にせ教師は、「私は皆さんに、間違った教えを伝えに来ました。」などとは言いません。いつの間にか人々の間に入り込んで、いつの間にか正しいみことばの教えから私たちを間違った方向へと引っ張っていかうとするのです。すべてが事前に計画された悪賢い策略だったのです。

こうして私たちは三つのことばを見ました。どれだけ間違った教えが危険なものか、私たちの罪や悪やそういったものがどれだけ危険なものかをわかっていたパウロ。そうすると、なぜパウロが改めて「間違った教えに気をつけなさい。」と言いつづけていたのか、理解できません？どうしてパウロが、自分が愛している兄弟姉妹たちに対して、繰り返し「危険だから」「巧妙だから」と警告を与え続けてきたのか、その思いが想像できません？パウロはさまざまな人たちに対して警告を与えていました。例えば、約三年もの間一緒に過ごしたエペソの長老たちに対してもこのように忠告していました。使徒 20：29-31に「:29 私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、群れを荒らし回することを、私は知っています。:30 あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。:31 ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。」またローマにいる兄弟姉妹にもこのように強く警告していました。ローマ 16：17-18「:17 兄弟たち。私はあなたがたに願います。あなたがたの学んだ教えにそむいて、分裂とつまづきを引き起こす人たちを警戒してください。彼らから遠ざかりなさい。:18 そういう人たちは、私たちの主キリストに仕えないで、自分の欲に仕えているのです。彼らは、なめらかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましているのです。」と。こうしてパウロは、教会の安全というものに心を配っていました。人々がいろいろな教えにだまされて真理から外れていかないようにと、何度も注意勧告をしていました。愛する兄弟姉妹たちが偽りや罪に陥るということを彼は何よりも望んでいなかったのです。

では、私たちはどうでしょう？私たちは今こうして、誤った教えや悪がいかに巧妙なのかを見ました。果たして私たちは、パウロが危険視していたそのようなものを彼と同じように危険視しているでしょうか？どれほどサタンの働きに日々注意を払っているのでしょうか？罪から離れようとしているでしょうか？そしてもう一つ言うなら、自分だけではなくて、ほかの兄弟姉妹の信仰を悪から守ってあげることが私たちにとってどれほど大切なものであるか、と考えているのでしょうか？皆さん、私たちを神様やその真理から引き離そうとする悪いものというのは、パウロの時代だけの問題ではありません。エバをだましたそのサタンの働きは、あの時に終わったのでもありません。今もなお変わらずに私たちがだまして、私たちを惑わすような人の悪巧みや、ずる賢さ、悪意に満ちた策略というものは周りにあふれているのです。サタンの手段は狡猾でした。みことばは、「サタンは光の御使いにさえ変装する」と言っています。（Ⅱコリント 11：14）また、私たちが持っているその罪も、巧妙です。あらゆる手段を用いて、ときにそれ自体は良いものさえも用いて、私たちが真理から離れてみことばを妥協して、神様に従うことよりも自分を優先するようにと少しずつ少しずつ惑わしていきます。間違った教

えを徐々に教会の中にもたらし、混乱を生みだして、教会が一致しないようにと働き続けるのです。そんな間違った教え、そのような悪に私たちは決して負けてはいけません。

ではいったいどのようにして、こんな欺きや惑わしに対して私たちは立ち向かうべきなのでしょう？危険を知っていたパウロは何をしていました？コロサイの教会を含めて兄弟姉妹を心から愛していた彼は、その危険を忠告し続けていました。人々の目をみことばに向けさせて、彼が教えたその真理を何度も何度も思い出させていました。必要であれば罪を正してあげ、そして何より、彼らの前にキリストの姿を示し続けていたのです。「間違った教えにだまされてしまう愚かな弱い者たちだ！」と彼らを切り捨てることは決してしませんでした。そうではなくて、彼らの信仰の歩みを自分のことのように心配して、出来る限り危険を遠ざけようとし続けていたのです。こうしてキリストを愛していた彼は、兄弟姉妹のことも心から愛していました。そして危険に対して、警告を伴う心づかいを教会に対して示していたのです。これも皆さん、私たちにとっても模範にできる三つ目の特徴でした。

4. 喜びを伴う心づかい 5節

そして最後、パウロの心づかいの特徴として四つ目に見られるものは「喜びを伴う心づかい」です。愛する兄弟姉妹の成長を願って多くの犠牲を払っていたパウロは、そのことを本当に喜んでいました。5節でこうまとめています。「私は、肉体においては離れていても、霊においてはあなたがたといっしょにいて、あなたがたの秩序とキリストに対する堅い信仰とを見て喜んでいます。」と。パウロはやはり、彼らのことを心から愛していました。投獄されていた彼は、確かに肉体的には遠く離れていました。ましてや、彼らに直接会ったこともなかったのです。しかしそれでもなお、彼の霊は彼らとともにありました。彼らの状態を常に気にかけて、その歩みに心を配り続けていたのです。そのために彼は多くの犠牲も払いました。これまでに学んできたように、パウロは彼らのためにいろんな苦悩を覚えて苦しむこともありました。まさに苦闘していたのです。しかし、どんなに大変に思える働きであったとしても、それらは彼にとって重荷ではありませんでした。愛する兄弟姉妹が信仰に堅く立ち続けてくれること、信仰に堅く立って歩み続けてくれることを彼は自分の喜びとしていたのです。

5節の最後にこんなことばがありました。「あなたがたの秩序とキリストに対する堅い信仰とを見て喜んでいます。」と。ここで使われていた「秩序」ということばと「堅い信仰」の「堅い」ということば、「秩序」と「堅い」この二つのことばはどちらも軍事用語として使われたりするものでした。少し場面を想像してみてください。「秩序」ということばは「戦うためにきちんと整列した兵士の列のこと」を表しています。戦いに行こうとしている兵士たちが隊列を組んで、一列一列がピシッと整っているそんな状態のことです。「堅い」ということばは、そのように「隊列を組んだ兵士たちが堅く結びついている状態のこと」「その編隊の強固さ」を指していました。するとこれらのことばが教えてくれるのは、コロサイの人たちは個人的にも全体的にも戦う準備ができていた、ということです。戦う準備が整っていた、ということです。何と戦うのか？にせ教師たちが入り込んでいろいろな問題が起こっていました。確かにその中で、心が落ち込んで不安や悲しみを覚える場面もあったでしょう。しかし、それでも彼らはこの中で堅く信仰に立って、その中で戦い抜こうとしていました。そんな彼らの様子を知ったパウロは、どう思ったと思います？彼らの信仰の状態は、彼の心に何をもちたかと思いませんか？それは、最高の喜びでした。彼はそのことを神様に感謝していたのです。愛する教会の兄弟姉妹たちがどんなときも揺るがされずに信仰に堅く立っているということ、それは彼にとって何よりも嬉しい知らせでした。つまり、教会の霊的な状態、兄弟姉妹たちの霊的な成長、それがパウロの喜びの大きな理由だったのです。それが彼に喜びをもたらしていました。でも別にこれはパウロだけに限った話ではありません。例えば、ヨハネもこのように言っていました。Ⅲヨハネ3-4にこう書いています。「:3 兄弟たちがやって来ては、あなたが真理に歩んでいるその真実を証言してくれるので、私は非常に喜んでいます。:4 私の

子どもたちが真理に歩んでいることを聞くことほど、私にとって大きな喜びはありません。」と。パウロにしてもヨハネにしても、愛する兄弟姉妹たちが真理に歩み続けていることを自分の喜びとしていました。

では、私たちはどうでしょう？パウロやヨハネのように、ほかの信仰者たちの忠実な歩みを喜んでいらっしゃるでしょうか？兄弟姉妹たちが堅く信仰に立っているということが、どれほど私たちにとっても重要なものであるか、と考えているでしょうか？パウロはコロサイの兄弟姉妹の霊的成長を願っていました。どんな状況にあったとしても、彼らが真理に堅く立って歩むことを祈っていました。そして、それが彼にとっての何よりの喜びだったのです。そしてそれが喜びであったからこそ、彼は彼らのために受けるどんな犠牲も痛みもいとわなかったわけです。こうしてパウロは喜びを伴う心づかいを教会に対して示していました。そのような喜びを伴う心づかいは、今の私たちにとっても模範にすることのできる四つ目の特徴でした。

さて、これで私たちは四つすべての特徴を見終えました。教会に示したパウロの心づかい、それは、苦闘を伴うものであり、目的を伴うものであり、警告を伴うものであり、喜びを伴うものでした。振り返ってみて、どうでしたか？まさにパウロは彼自身のことではなくて、神の家族のためにすべてをささげていた人物だったと、神様を愛し、キリストを何よりも愛していたパウロは、大きな愛情を兄弟姉妹に対しても示していた人物だったと、思いませんか？

では、私たち自身はどうでしょう？私たち自身は、彼のような心遣いを教会に対して示しているでしょうか？人々の心を励ましてあげて、愛において一致して、霊的成長のために教えて、危険を警告して、そしてそのためであれば喜んで苦闘する・・・そのような歩みをする者へと私たちは変えられ続けているでしょうか？ひとりひとりがよく考えてください。あなたは神の家族を、兄弟姉妹のことを本当に愛しているでしょうか？もちろん、私たちにはまだまだ弱い部分もあります。頑なな部分もあります。私も皆さんも互いに成長しなければならぬ部分は数多くあります。その成長のための鍵はなんでしょう？それは、私たちが人々を見るその前に、キリストの姿をまず見ることです。まず、その姿を知ることです。いったいどれほどの愛を主から受けたのか、その真理を思い出し続けることです。私たちは、互いを愛そうとします。それは、神様がまず私たちを愛してくださったからです。ですから、愛を示さない理由を周りの人のせいにははいけません。私たちが愛を示す理由は、周りの人が自分の基準を満たしたから示すものでも、周りの人が成長したから満たすものでもありません。私たちが愛を示す理由は、神様がまず私たちを愛してくださったからです。覚えるべきは、どのような愛を神様が示してくださったかです。どんな愛をキリストが十字架で示してくださったかです。その愛を覚えて、そしてパウロの示した心づかいに倣って、ともに神の家族である教会として歩み続けていきましょう。